

# 京都国際マンガミュージアム

京都国際マンガミュージアム  
京都市中京区烏丸通御池上ル（元龍池小学校）



今回紹介いたしますのは、日本初のマンガを総合的に調査・研究する文化施設「京都国際マンガミュージアム」です。マンガと言えば、今や世界から注目を集める日本の代表文化ですが、一般的には図書館で扱う資料とは違うと考えている方も多いのではないでしょうか。一体、どのような施設なのか大変に興味を持ちまして、今回取材させていただくこととなりました。

京都市街の中心部、烏丸御池の交差点から北へ2分ほど歩くと、昭和初期に建造された元龍池小学校が見えてきます。「京都国際マンガミュージアム」はその校舎を再利用する形で開設されました。外からはどう見ても学校の校舎にしか見えませんが、歴史ある建物の外観を残しつつも、中身は新しいモノを取り込もうとするところに、京都人ならではの気風を感じさせられます。

入館すると、正面にはミュージアムに関連するグッズを扱うショップがあり、左手に進むと受付、その奥には「マンガ万博」のコーナーがあります。そこに並べられているのは、どれも見たことのある日本のマンガですが、よく見るとそれらは全て海外の言語で書かれており、日本のマンガが世界中でどれほど読まれているのかがよく分かります。



▲マンガ万博コーナー



▲事務局長 山元様

広報の中村様に校長室…ではなく館長室に案内していただき、そちらで事務局長の山元様からミュージアム開設に至るまでの経余曲折や、今後の展望、マンガ文化の可能性などについてお話を伺いました。山元様はとても気さくな方でしたが、マンガについて話される際の様子からは、思いの強さが伝わってきました。今年で創設から 16 年目を迎える「京都国際マンガミュージアム」ですが、当初はマンガを専門に研究するマンガの図書館として開設される予定だったそうです。寄贈された資料はなんと 20 万点（現在は 30 万点）に及び、それらの資料を収集保存するだけでなく、一般にも公開し、広くマンガ文化を発信していくことが設立の目的でした。そこで京都市に相談したところ、開設地の候補として挙がったのが、現在の元龍池小学校だったそうです。龍池小学校（明治 2 年 - 平成 7 年）は、現在の学校制度が創設される以前に、地域の方々がいわゆる「かまど金」を出し合って設立したという歴史のある小学校です。残念ながら閉校となってしまいましたが、地域の方からすれば、「そんな思い入れのある場所にマンガの図書館だなんてとんでもない」と、反発する声が多かったそうです。

そのため、開設にあたり、単なるマンガ図書館ではなく地域の伝統産業とマンガをコラボレーションさせた新たな価値観の創出や人材の育成、観光資源として博物館的な機能を併せ持つ新たな文化施設として、期待が寄せられることになりました。日本初の試みですので、全てが手探りの状態からスタートして、協力を得られるまでに 3 年がかかったそうです。



インタビューの中で特に印象的だったのは、山元様が度々口にされる「マンガそのものの“在り方”を問う」という言葉でした。例えば、読まれなくなったマンガは図書などとは違い、保存されることはまれで大抵の場合捨てられる宿命にあると言えます。しかし、実は《捨てられるマンガの中には、私たちが普段マンガを読んでいて感じること以外にも、様々な魅力や可能性があるのではないか》と考え、マンガそのものの価値を問い合わせることこそが「京都国際マンガミュージアム」の目的なのだと、お話を伺っていて強く感じました。また、マンガの持つ“可能性”について、こんなお話を伺いました。海外から訪れる来館者には、マンガを通じて日本の食べ物に興味を持ち、実際に食べてみたくなって日本に来たという方も大勢いらっしゃるそうです。食べ物繋がりで言いますと、いただいた資料の中に『マンガとご飯のいい関係』と題された冊子があるのですが、こちらは農林水産省との共同企画となっており、研究員の方がお勧めする“マンガ飯”が紹介されています。また後半には漁業や農業を扱ったマンガの一覧が掲載されており、こんなにあるのかと驚かされました。山元様によると、こういった資料のリスト化も活動の一環だそうです。この

ようにマンガは情報を発信するだけでなく、人や文化を繋げる役割も担っており、それを利用して、国や省庁を巻き込んだプロジェクトを展開しているそうです。



インタビューを終えると、中村様が館内を案内してくださいました。まず2Fにある館長室を出ると「大マンガラクタ館」と書かれたレトロな看板が目に入ります。こちらは、荒俣館長が地下に眠る25万点の資料の中から発掘してきた“お宝”が展示されており、これらが“ガラクタ”なのか“お宝”なのか、インタビューの後では思わず考えこんでしまいます。

中央の吹き抜けにはマンガミュージアムを代表する「火の鳥」のオブジェが常設展示されています。こちらは、伝統産業とのコラボレーション企画で、紅松を材料にした「寄木造り」で組まれ、瞳は「玉眼」という仏像彫刻の技術によって制作された、巨大な木造彫刻となっています。



@Tezuka Productions



東側にある元講堂はメインギャラリーとなっており、「マンガって何?」の常設展示ではマンガの歴史や制作過程が紹介されている他、「マンガ家」「出版者」という仕事や産業についても知ることができます。圧巻なのは、壁一面に展示されたあらゆるマンガの数々です。

訪れた際の企画展示「大乙嫁語り展」では、森薫先生が 2008 年から連載している、19 世紀半ばの中央アジアを舞台とした人気漫画の原画を展示していました。イラストの美しさだけでなく、緻密に描写された衣装などからは、その土地の文化を感じることができ、実際にやってみたいと思わせるような魅力があります。



3Fに上がると「研究閲覧室」があり、こちらでは公開されていない 25 万点（実際には未整理の資料を合わせるとさらに増えるそうです）の資料を閲覧・研究ができます。この日は、ちょうどアフリカで調査を行っていた研究員が入手したという、フランスで発行されたマンガが届いたところでした。ここでもマンガを通じて世界中が繋がっていることを実感しました。「こども図書館」には約 3000 冊の絵本を配架しており、親子でくつろげる場として提供されています。今後は学習マンガも増やして、大人も子どもも楽しんで学習のできるようにしていく計画もあるそうです。廊下を埋め尽くす書架「マンガの壁」に展示されている資料は見て楽しむだけでなく、実際に手に取って読むことができます。考えて見ると、学校の廊下で堂々とマンガを読めるというのは、小学生の時にはあり得ないことでしたから、何とも言えない開放感があります。展示だけでなく、校舎自体も魅力的で、東西で床の形状が異なっていたり、柱に彫刻の施されたレリーフがあつたりと、非常に趣のある建物です。建築に興味のある方が建物を見学に来られることもあるそうです。



▲マンガ工房



▲マンガの壁

さて、他にも紹介しきれていない魅力的な展示が沢山ありますが、残りは実際に訪れた際にご覧いただければ幸いです。このように「京都国際マンガミュージアム」は図書館的機能だけでなく博物館的機能も兼ね備えており、特に来館者に「読みたい」と思わせるだけでなく、資料を通じて、その先を「考えさせる」展示の手法は非常に勉強になりました。また、資料の価値に対する見方や資料の活用方法など、マンガの読み方が変わってしまうほどディープなお話を聞かせていただきました。日本で初めてマンガ

を総合的に扱うマンガミュージアムの開設された場所が、歴史ある京都市であることにも、大きな意味があるように感じます。今では寺社仏閣と同様に、修学旅行のコースになるほどの観光名所でもありますので、京都を訪れた際にはぜひ一度立ち寄ってみてはいかがでしょうか。



▲マンガ家の手

取材者 キャリアパワー司書スタッフ 本多 峻